お嬢さまの冒険

夏目（なつめ）　棗（なつめ）

❑❑ 登場人物 ❑❑

●香坂千歳(こうさかちとせ)＝身長：１５２㎝、体重：４７kg、スリーサイズ：９５(Ｅカップ)・５９・９２。椎葉学園(しいばがくえん)一回生。あまり大きくはないがＩＴベンチャー企業の社長令嬢。フランクな恋を求めて冒険中。

●緒田嘉之(おだよしゆき)＝椎葉学園二回生。軟式テニス部、副キャプテン。千歳の親友である蕪木心美(かぶらぎここみ)の兄のクラスメイト。元カノとエッチは経験済みだが現在はフリー。

【注意事項】

普通にこのＰＤＦファイルを開くとウインドウサイズで開きます。パソコンの設定にも拠りますが多少縮小されて表示されるのではないかと思います。文章を読むには問題ありませんが、ＣＧを鑑賞する場合は多少拡大(１２５％くらい推奨)して戴いた方が綺麗に表示される筈です。

また、前半は二人の馴れ初めをちょっとエッチなライトノベル風に描いています。手っ取り早くエッチシーンが読みたい場合は３５頁辺りにお進みください。（意味が通じない場合もありますのであまりお勧めしませんが……）

（きたな……）

と、千歳（ちとせ）は思った。

映画が始まって三〇分あまり経っていた。そもそも、あまり混んでいない客席の入り口から離れた最後列に座った時点で彼の目論見は明らかだった。映画の内容も極ありふれたリバイバルの恋愛物である。彼がそれを選んだ時点で察しがついていた、と言った方が良いだろう。いや、本当は、千歳の巧みな誘導がその映画と席を選ばせたのかも知れなかった。

膝の上のバッグに乗せた手の甲に彼の掌が重ねられていた。

顔を前に向けたままで、ちらっ、と彼の様子を盗み見る。素知らぬ顔でスクリーンを見詰めているが、彼の手の目的地が千歳の掌である訳がない。

今日が三回目のデートだった。

最初のデートはお決まりの遊園地だった。手を繋いで遊び廻り、お化け屋敷で彼の腕にしがみついて胸の膨らみを押しつけてみた。ここで**がっつく**ようならその後の付き合いをパスする予定だった。しかし彼は、千歳を自宅前へと送り届けるまで節度を

守ってエスコートしてくれたのだった。だからご褒美にキスを許した。
暫く千歳の手の甲を摩っていた彼の手が、するり、と膝の上に移った。千歳は膝に乗せてあったバッグをさり気なく隣のシートに移してから彼の肩に、ことん、と頭を委ねてその耳元で囁いた。
「先輩の、えっちっ！」
そして、腕を絡ませて**けしからん膨らみ**を押しつけると恥ずかしそうに言葉を紡いだのだった。
「……お触り、だけですよ？」
二回目のデートで千歳はショーツの上から触る処まで許していた。
つまり、いま千歳の膝の上に宛がわれている彼の手指はもう少し先まで進む事を許されたという事だった。
些かぎこちなく彼の指先が千歳の短いスカートの裾を潜る。千歳が誘うように膝頭を緩めると、その隙間に侵入した彼の手指が柔らかな生足を滑ってゆく。
「やんっ♪……擽ったいぃ……」
身を捩った千歳の**けしからん膨らみ**が彼の二の腕で、むにょん、と潰れた。
その胸の膨らみを揉みたい誘惑に打ち勝って、彼の手指は当初の目的地に向かって

進んでいったのだった。

＊

そんな彼、緒田嘉之(おだよしゆき)は、千歳が周到に選んで選び抜いた相手であった。

それというのも、ある意味、勢いで弟相手に初体験を済ませてしまった千歳だったのだ。その後、弟相手に数回肌を重ねてＳＥＸの気持ち好さと絶頂も経験していた。しかし、元より弟にラブ感情など抱いてはいなかったし、学園に入学して間もなくの頃に味わった『初恋イコール失恋』という大きな痛手を癒すには弟では如何にも役不足だった。

そこで、千歳は学園での三年間をフランクな恋に身を委ねる決心をしたのだった。様々な男の子と色取り取りの恋をしてみよう。それは、いずれ父の仕事を手助けする時の（継ぐかどうかは弟の成長次第だが）、きっと良い肥しとなるだろう……。そう思ったのだった。

では、**二人目の相手**を誰にするか。まず、読みもしなかったラブレターの差出人を

チェックして、その名前を全て除外した。そんな軟弱な相手はご免である。自分に靡(なび)いていない相手を落としてこそ、恋の醍醐味というモノだ。

次に考えたのが、エッチ経験数回（しかも弟一人）の自分に『童貞』の相手はまだ荷が重過ぎる、という事だった。かといってプレイボーイもまだ早過ぎる。何より相手にイニシアチブを取られるのは我慢ならなかった。年下は論外だし同級生も今はパスしたい。ふと、父親くらいの年配の男性が思い浮かんだ。それは悪くない考えに思えたが、如何(いかん)せん接点が見つからなかった。安直なお金目当ての出会いなど糞食らえだった。となれば、学園の上級生が今の自分にはベストポジションか。

えっち経験が一人か二人（一人がベター）で今はフリーの上級生。しかも千歳に惚れていない相手。（何しろ、以前もそうだったが、学園に入学して僅か数ヶ月にしてシューズロッカーに入るラブレターの数は半端でなかったからだ。）しかし、そんな都合のいい相手が居るだろうか。

処が、自分で設定した高過ぎるハードルに途方に暮れた千歳に、瓢箪から駒がでたようなぴったりの相手が現れたのだった。

その日、親友の蕪木心美(かぶらぎここみ)と昼食を一緒しようと声を掛けた千歳に

彼女は済まなそうに手を合わせた。
「ごめん、千歳ちゃん……今日はお兄ちゃんにお弁当を届けないといけないの……」
「いいわよ、待ってるから早く行ってらっしゃい♪」
笑って千歳がそう答えると心美はますます済まなそうに言った。
「でもね、きっとお兄ちゃん、一緒に食べようって言うと思うんだ……」
それはあり得る……と千歳は思った。何しろ、心美の兄のシスコン振りは一年のクラスにまで知れ渡る程だったからだった。いや、それ以前に千歳自身が、言葉どおり身を持って知っていた。何故なら『初恋イコール失恋』の相手こそ、他ならぬ心美の兄だったからである。心美と親しくなって彼女の家に初めて遊びに行った日にその兄にひと目惚れしてしまった千歳だったのだ。しかし、同時に彼の眼には妹しか映っていない事も即座に判り、一瞬で失恋を味わう派目になってしまったのだった。
（いいでしょう、受けて立とうじゃないのっ！）
千歳は自分の心が彼を吹っ切れているかの試金石と考えて意気込んで答えていた。
「あたしもご一緒するわっ！」
勿論、心美は彼女が自分の兄に一目惚れして即座に失恋した事など知らない。だから心美は鼻息も荒く答えた親友を不思議そうに見遣ったのだった。

そして、心美の兄の教室に突如乱入した美少女二人と兄の食事の輪に、まず心美に惚れていた神部雅樹(かんべまさき)が加わり、そこに通り掛かって声を掛けたのが緒田だった。

「おや、今日は綺麗処が揃ってるね♪」

軽く揶揄(からか)って通り過ぎようとした彼を神部が呼び止めた。
「おお、緒田も一緒に食おうぜっ！……紹介するよ、香坂……ええと……」
「香坂千歳(こうさかちとせ)ですっ♪」
「うん、うん、千歳ちゃん……可愛いだろ♪……お前も別れた彼女を忘れるには新しい恋をするに限るさあっ！」
将を射んと欲すればまず馬を、だったのかどうか心美ラブの神部が緒田を誘い込んだのだった。
「お前なあ、それは香坂さんに失礼だろ？」
はにかむようにそう言った誠実そうな緒田に、千歳は極上の笑みを返していた。
「いいえぇ……あたしで良ければ是非ご一緒してください、緒田先輩っ♪」
こうして千歳はこの昼休みの間に、緒田が一年近く付き合った彼女が春休みに家族の都合で北海道へ引っ越して行った事。初めは遠距離恋愛をと考えていたが学生の身ではその距離は遠過ぎて結局別れざるを得なかった事。そして、一番のポイントである二人が『えっち済み』だったらしい事を仕入れていた。
(なんてお誂え向きな……しかもハンサムさんだしぃ♪)
その夜、挨拶がてら交換したメアドに早速メールした千歳の積極アタックが功を奏

して、その週末には遊園地への初デートとなったのだった。そして、その別れしなのキスで千歳は彼の『えっち済み』を確信したのだった。至極当たり前のように舌を絡ませてきた彼のキスは、えっちは経験していても何処となく初々しさも残っていて、千歳は彼を『二人目の相手』に決めたのだった。

*

二回目のデートはティールームで待ち合わせてからウインドウショッピングを楽しんだ。前回は遊園地で散財させてしまったから、学生のデートとしてはＯＫだろう。

しかし、千歳はある計略を練っていたのだった。暫く手を繋いで散策してから、ふと、思い出したように千歳が言った。

「あっ、あたし買いたい物があるのでちょっと寄り道していいですか？」

「構わないよ……そうだ、今日は安上がりなデートになっちゃったし、僕がプレゼントしようか？」

「とんでもないですよぉ……自分で身につけるモノだしぃ……」

恥ずかしそうに言ってから千歳は、さもたった今思いついたように続けた。

「そうだっ♪……それじゃあ、緒田先輩が選んでくださいます？」
「え？……ああ、勿論いいよ……ブラウスとか、かな？……でも、千歳ちゃんセンスがいいから、僕が選んでもどうだろう？」
『身につけるモノ』と言われてブラウス辺りと思ったのか照れ臭そうに答えた緒田は、既に千歳の掌の中で踊らされていたのだった。
「うふっ♪……あたし、まだ緒田先輩の好みが判らないからぁ……是非ともお願いしますねっ❤」
そして、千歳は緒田の腕に自分の腕を絡ませると、その先にあったビルの中に入っていったのだった。
極ありふれた雑居ビルの五階で千歳とともにエレベーターを降りた緒田は些か途惑いを覚えた。二人の眼の前にある事務所風の鋼鉄製の扉は、とても若い女の子の衣服を扱う店には思えなかったからだ。
「こ、ここなの？」
「はいっ♪……あんまり目立たないけど、お品は確かなんですよっ♪」
「ええと……とほこ…ぴゅあ？」
扉に付けられたプレートを読む緒田を千歳が擽ったそうに見返した。

「《ＴＯＨＯＫＯ－ＰＵＲＥ(トウコ－ピュア)》って読むんです……この業界では結構人気があって、芸能人も時々寄るらしいですよ♪」
「ああ……それでこんな風にさり気ない作りなのかなあ……」
何となく納得した緒田に腕を絡ませたまま千歳は扉を開いたのだった。
そして、緒田の眼の前に華園が広がっていた。
《ＴＯＨＯＫＯ－ＰＵＲＥ(トウコ－ピュア)》とは、デザイナー亙井透子(わたらいとうこ)の主宰する上流階級の奥さまお嬢さま方ご用達のオートクチュール工房《ＴＯＨＯＫＯ》のハイティーン向けのランジェリー専門店だと知っていたら、緒田は素直に入っていただろうか。しかもこのブランドは、ハイティーン向けにしては過激なデザインでつとに有名だったのである。
呆然と立ち竦む緒田に寄り添うように入店した千歳に、黒のツーピースを、きっちり、と着こなした美しい女性が笑みを浮かべて挨拶した。
「これは千歳お嬢さま、いらっしゃいませ♪」
ファーストネームで呼び掛ける店長らしい女性の仕草に、千歳がこの店の常連客である事が知れた。しかし、緒田の視線は美人店長の張り裂けんばかりの偉大な胸に釘付けになってしまっていた。

千歳の、学園生としてはかなりけしからん膨らみを遙かに凌駕する、美人店長のタイトなスーツ生地を押しあげるボリュームを何と形容したらいいのだろうか。
呆然と見詰められる視線には慣れているのか、彼女はそんな緒田に、ちらっ、と視線を絡ませてから揶揄(からか)うように訊いた。
「今日は彼氏さまご同伴ですのね？」
「うふっ……まだお付き合い始めたばかりですけど、今日は緒田先輩が選んでくださるって……ねっ♪」
擽ったそうに答える千歳に、緒田は返す言葉が見つからなかった。
「いや、あの……僕は……えっと……」
まさか下着を選ばされるとは思いも拠らなかった緒田が途惑う様子を気にする風もなく美人店長が言った。
「まあ、お羨ましいご関係ですのね？……緒田さま、これからもどうぞご贔屓になさってくださいませね？」
『お羨ましいご関係』と言われて緒田が頬を染める。下着を選ぶという事は『エッチ済みな関係』と思われたのだろうか。いや、それよりも、男の自分がランジェリーショップを贔屓にしてどうする……と、緒田は途惑いを隠せなかった。

しかし、千歳は気にする素振りも見せずに早速店内を物色し始めた。勿論、腕を絡ませた緒田を引き連れてだったが。
「ねえ、緒田先輩はどんなのがお好き？……やっぱり、**えっちい**のがいいですか？」
返事に窮する緒田を尻目に、美人店長がケースから一枚取りだして二人の前に広げた。
「それなら、これなど如何でしょう？」
真っ赤なレースの紐のように小さなショーツだった。
「まああっ❤」
「ちょ、ちょっとそれはっ！」
二人二色の声をあげる中、美人店長が更にとんでもない仕様を説明した。
「これね、ほらここが、開くんですよ♪」
そう言ってクロッチ部を、くぱあっ、と広げて見せたのだった。
「や、やあん❤……何の為にぃ？」
ハートの吐息など飛ばして千歳が恥ずかしそうに緒田の腕にしがみつく。
「それは、緒田さまの方がご存知じゃないかしら？」
澄ました顔で美人店長が緒田に艶めいた視線を投げた。

「や、その……ち、千歳さんにはもう少し上品な物の方が……」

何故か腰を退き気味に答える緒田に美人店長が次なる**獲物**を広げて見せた。

それは一見してブラカップのついたタオルか手拭いのような形状をしていた。
「な、何ですか……それ？」
「これは当社の社長でもあるチーフデザイナーの亙井(わたらい)が考案しました和服用のスリーインワンとでも申しましょうか……まあ、補正の効果はございませんが、ブラと湯文字をひとつにした、お遊び商品でございますわ♪」
「湯文字……って何ですか？」
美人店長の説明にますます不可解そうに首を捻る緒田に、千歳が恥ずかしそうに答えた。
「お着物の時は……しょ、ショーツは穿かないモノなんですよっ！……こ、こう、腰巻みたいな薄布を巻くんですぅ……」
自分から言っておいて照れる千歳に、緒田も釣られるように頬を染めて言った。
「もう少し……そ、その……普通の物はないのでしょうか？」
更に次なる獲物を物色していた店長が、少し残念そうに右手奥を指して答えた。
「それでは、あちらの可愛い系の辺りをご覧になりますか？」
「ええーっ？……あたしはあんまり、ひらひら、した可愛い系は似合わないと思うなあ……」

確かに、千歳の性格を考えると『可愛い系』よりも『セクシー系』だろうか。
「そ、そそ、そうですね……多少セクシーな物の方が……あっ、でもあまり過激でない……ような……」
選んで欲しいと言われた手前、生真面目な緒田が必死に言葉を絞りだす。
「畏まりました、それではこちらへ……」
美人店長が澄ました顔で、**いつも千歳が選んでいるコーナー**に先導しながら緒田に訊いた。
「緒田さまはどんなお色がお好きでございますか？」
「え？……ぼ、僕ですか？」
すっかり二人のペースに填められた緒田が途惑い気味に答えた。
「ち、千歳さんには……み、緑色なんて…ど、どうでしょう？」
「畏まりました……」
美人店長が辿り着いたコーナーで何点か選び始めた。
先程の過激な下着が並ぶコーナーに比べれば比較的おとなし目でも、布面積を**かなり節約した**色取り取りのショーツが並ぶ陳列棚に緒田の視線が泳いでいた。
「こんな処でしょうか？」

カートに黒ビロードのウエスを敷いて、その上にグリーン系のショーツを数枚広げて美人店長が振り返った。
「まあっ♪……これ、素敵ぃ❤」
その一枚を手にとって千歳が華やいだ声をあげた。
「ほ、本当だ……緑というより……」
「流石お眼が高い……それは今年の新色で萌黄色でございます……」
「ね？……緒田先輩っ、似合うかな？」
千歳がそのショーツをスカートの前に宛がって緒田を見あげた。
「や、その……と、とても…に、似合って…ますよ……」
千歳の制服の黒いスカートの前に宛がわれた、芽吹いたばかりの若草のような萌黄色のショーツにまたも視線を泳がせて緒田が答えた。
「うふん❤……それじゃあ、これと、これと……これも……他に朱美さんのお薦め、ありますか？」
千歳が何枚かを横に取り分けて美人店長に訊いたのだった。
それから暫く、美人店長の選んだショーツをその都度スカートの前に宛がっては緒田に感想を求めていた千歳が、漸く満足したように言った。

「それではこれだけ戴きますわ……ええと、これと、これ……こっちのはブラとセットでお願いしますね……」
そして緒田を、ちらっ、と見遣って言った。
「それから、何枚か試着して気に入ったのを穿いて帰りますのでタグは取ってくださいます？」
「畏まりました、いつもありがとうございます。」
深々と頭を下げて美人店長は店員を呼んでタグを取り始める。
その時、緒田が控えめに声を掛けた。
「あ、あの……千歳さん……で、デートの記念に一枚だけでも僕からプレゼントさせてください……」
「え？……とんでもありませんっ！……選んで戴いただけで嬉しかったのですもの、そんなお気遣いなさらないで……」
そして千歳は小声で付け加えた。
「それに……ここ、結構お高いのよ？」
その千歳の気遣いを遮るように緒田が言った。
「そうだ、あの最初の……もえぎ…色？…のショー……あ、あれを…ね？……あれを

一枚、僕からのプレゼントという事で……て、店長さん、そうしてください！」
緒田は、手元は休めずに二人の会話を微笑まし気に眺めていた美人店長に言ったのだった。
「畏まりました。こちらの萌黄色のショーツは緒田さまからのプレゼントという事で……リボンはお掛けいたしますか？」
美人店長がわざわざそのショーツを広げて見せた。
「い、いや……そ、それ程大げさな話でなく……か、会計だけ僕の方に……」
「承知致しました……それでは、千歳お嬢さま、ご用意が整いましたので……」
そう言って美人店長は、タグを取り終えたランジェリーが山盛りの黒ビロードのウエスを緒田に差しだしたのだった。
「え？……ええ？……っ」
緒田の途惑いなど気にする風もなくその手にランジェリーの山を手渡すと、美人店長は千歳に訊いた。
「千歳お嬢さま、奥の部屋も姿見はございますが……」
「いいえ、フィッティングルーム(試着室)で大丈夫ですわ♪」
美人店長と意味深な笑みを交わして千歳がまた緒田の腕を取った。

「緒田先輩、こっちですぅ♪」
「え？……あ、あの……こ、これは？」
緒田が腕を引っ張られて両手の上で揺れるブーケのような『華束』に慌てたように訊いた。
「あら、お着替えしますの……手伝ってくださいますよね？」
「え、ええーっ!?」
先程来、微妙に前屈みな緒田を擽ったく見遣って千歳が言った。
「冗談ですってばあっ♪……フィッティングルームの前で手渡してくだされば良いんですぅ♪」
そして、到着したフィッティングルームのカーテンを（実はこの店にはドアタイプのフィッティングルームの方が多いのだが、わざわざカーテンタイプを選んで）全開にすると、千歳は中に入って向こう向きのままスカートを脱ぎ始めた。
「ち、千歳さんっ!?……か、カーテン、かーてんっ！」
緒田が両手の『華束』に焦りながらもカーテンを閉めた。その時既にスカートは膝下まで降ろされていたのだったが。
「あら、やだあっ!?」

幾分白々しい悲鳴の後に、くっ、くっ、と含み笑いが聞こえたような気がして緒田は少しく面白くなかった。あれはわざとだな……と思いながらも、真っ白な双尻の間のサファイアブルーの鮮やかなショーツも脳裏に甦ってしまい、またも前屈みになって下を向いた緒田だった。

「緒田先輩〜い♪」

声を掛けられて恐る恐る顔をあげるとカーテンの横から、ちょこん、と顔だけ覗かせた千歳が悪戯っぽく見詰めていた。

「最初はどれを穿いて欲しいですか？」

何を言われたのか判らずに途惑う緒田に、顔の下から片手をだした千歳が、やんっ、と小さく悲鳴をあげてカーテンを身体に巻きつけた。

「いまぁ、すっぽんぽん……えへっ❤」

勿論、下着の試着は身に着けていた下着の上からがマナーだが購入済み（会計はこれからだが）であれば問題あるまい。それよりもカーテンが、こんもり、と双つ膨らんで慌てて視線を落とした緒田は、漸く両手のウエスに乗った下着を選べと言われたのだと気がついたのだった。

カーテンで、きっちり、裸体をガードした千歳が片手を差し伸べてランジェリーの

山から選び始める。
「……緒田先輩がプレゼントしてくださったパンティはぁ……最後に穿いて帰るとしてぇ……」
わざわざ美人店長が一番上に乗せた萌黄色のショーツを大事そうに横に退けて、ランジェリーを漁っていた千歳の手が一枚のショーツを引っ張りだした。
「……あっ♪……これ、穿いて見ましょうか？……くぱあっ、てなるのっ❤」
「うわあっ!?……ち、千歳さん……そ、それ、買うんですかっ!?」
最初に美人店長が見せた殆ど紐のような真っ赤なレース地のショーツだった。
「うふっ♪……一枚くらいジョークで持っていても良いかなって……でもぉ、緒田先輩とのデートでは穿きませんけど、ね♪」
何処まで本気で何処まで冗談か、揶揄(からか)うように緒田を見遣って千歳が言った。
「…ええと、ブラも……あ、これね……それじゃあ、ちょっと穿いてみますね♪」
布面積の極端に少ないブラジャーとショーツを手にカーテンの向こうに引っ込んだ千歳が、小声で呟いた。
「……うわっ、ブラも小っちぁあいぃ……しかも透けてるしいっ……」

その声に、緒田が途惑うように辺りを見廻したが幸い他に客は居らず、美人店長はカウンターでノートパソコンに向かってキーボードを叩いていた。
「ジャーンっ!!」
わざとい擬音とともにカーテンが、シャーっ、と引かれて思わず緒田が振り返った。
真っ赤な紐を二枚、身に纏っただけの千歳が腰を拗(くね)らせてポーズを取っていた。
「おわあぁっ!?」
暫し見詰めてしまったのは男として責められまい。
「……ち、千歳さんっ!!」
漸く我に返った緒田が非難めいた声とともに慌てて後ろを向いた。
「もぉっ!!……先輩の、い・く・じ・な・しっ!」
またカーテンが、シャーっ、と引かれて微かに衣擦れの音がしてから千歳の声が聞こえた。
「もういいですよぉ!」
少し怒ったような声に振り返ると、先程のようにカーテンを身体に巻いた千歳の顔は悪戯っ子のように笑っていた。

そして、カーテンの横から件の**真っ赤な紐**をだして、ひらひら、させると言ったのだった。
「ねっ？　ねっ♪……どうでした？」
「や、その……ええと……っ……」
言葉に詰まる緒田に、揶揄(からか)うように千歳が言った。
「下着なんて、ビキニの水着と一緒じゃないですか！」
「そうは言ってもさっきのは殆ど紐……」
しっかり確認済みなのを吐露してしまった緒田がまた視線を逸らす。
「それじゃあ、もっと布の多いのならＯＫとぉ……」
千歳は手にしていた**真っ赤な紐**を、緒田の両手の上のウエスに戻すとまたランジェリーの山を漁り始めた。
「これなんかどうかしら？……ちょっと可愛い系だけど、ガーターにストッキングもついて布面積は大きいですよぉ♪」
「いや、だからね、千歳さん……」
しかし千歳は、緒田の意見などスルーして選りだしたランジェリーを手にしてさっさとカーテンの向こうに引っ込んでしまった。

緒田が困ったようにカウンターに眼を向けると、美人店長と従業員はパソコン画面に向かって何やら指差したりしていたが、きっと耳はダンボのようになっているに違いなかった。
「はあい、準備できましたぁ❤」
仕方なく（？）緒田が視線を戻すと、千歳はカーテンを巻いたまま顔だけ覗かせていた。
「今度は感想を聞かせてくださいますぅ？」
「いや、ですから……店長さんたちもいらっしゃるし……」
「上から？……それとも、下？」
緒田の言葉をスルーしてそう訊いた千歳の視線は、しかし、緒田の下半身に向けられていた。
「なっ!?……ど、何処を見て、訊いてんですかっ!!」
「いっちばん、正直な、と・こ・ろっ❤」
「だ、だからっ!?」
「上ねっ❤……はあい、どうぞぉ♪」
またも緒田の言葉をスルーし捲くって千歳が上半身だけカーテンを摺らせた。

千歳のたわわな双つのけしからん膨らみが、フリルで縁取られた淡いピンク色のブラジャーで寄せられて深い谷間を形作っていた。
「うわぉ♪」
思わず感嘆の声が洩れても致し方なかったろう。
「えへっ❤……あたし、おっぱいはちょっと自信ありぃ……なんちってっ♪」
そして、ぺろっ、と可愛い舌先を覗かせて千歳が訊いた。
「…下もいってみます？」
「いや、ですから千歳さんっ！」
緒田の抗議の言葉など何処吹く風で、千歳が勢いよくカーテンを捲くった拍子に足を滑らせてしまった。
「あ、危ないっ!?」
慌てて手を差し伸べた緒田の眼の前に、千歳の双つのけしからん膨らみがアップになっていた。
「ひ、ひぇえっ!?……ち、千歳さん……ち、ちちち……ちちっ!!」
「いっ…たたあっ……なによぉ、『ちちち』って？」
膝を擦りながら千歳が緒田を見あげた。

「だ、だから……ち、ちちち、乳首がっ!!」
よろけた拍子に片方のブラカップが摺れて桜色の乳首が顔をだしていた。

「やあん、恥ずかしいぃ……」
慌ててブラを直して千歳がはにかんだように見あげた。
「えへへぇ……失敗、しっぱいぃ……」
（先輩に乳首を見せるのはまだ早かったなあ……）

そして、気を取り直すように言った。
「それじゃあ、次はぁ……」
「ま、まだするんですか？」
途惑うように緒田が、ちらっ、とカウンターに眼を向けると、美人店長と従業員が慌てて視線を逸らしたような気がした。
「いいじゃないぃ……誰も居ないんだしぃ……」
「もう、千歳さんには負けました……でも、これでお終いですからね！……もう帰らないとお店の方にご迷惑ですよっ！」
生真面目な緒田らしい返事に千歳が残念そうに言った。
「はあい、判りましたぁっ！……それじゃあ、最後はぁ……あっ、緒田先輩、ちょっとお眼めを瞑っていてね？……選ぶの、見たらダメですよぉ？」
緒田が眼を瞑ったのを確認してから千歳はその手の中の『華束』から一枚選んでカーテンの陰に隠して言ったのだった。
「ちょっと待ってらして、ね♪」
それからカーテンを揺らし衣擦れの音をさせてから、千歳がカーテンの横から顔だけ覗かせて華やいだ声で言ったのだった。

「それじゃあ、景気良く三ポーズくらい、参りますわね❤」

何が『三ポーズ』なのか判らず、きょとん、と見返す緒田に構わず一旦顔を引っ込めた千歳が、シャーっ、とまたカーテンを全開にした。

呆れ顔の緒田の前に、両足を揃えて幾分前屈みになった千歳が両肘で双つの乳房を

寄せ、谷間を強調させて微笑んでいた。
いやそれ以前に、千歳が身に纏ったランジェリーはあの店長曰く『和服用のスリーインワン』とかいう代物だった。
千歳の下腹部の前に些か心許なく、ひらひら、と揺れる前垂れのような薄布の下は……。
（の、ノーパンっ!?）
緒田の喉が、ぐびっ、と鳴ったのを合図のように千歳がポーズを変えた。
今度は、半歩足を開いて爪先立った千歳が腰に両手を宛がってポーズを決めた。そして、緒田の視線を充分に愉しんでから、またポーズを変える。
次いで後ろ向きになった千歳は両手を頭に載せて腰を、ふりふり、させてから双つの柔尻を緒田に向かって突きだしてみせた。前側は一応は隠すべき処は隠れていたが、背後から見ると、首筋と腰に二本の紐があるだけだった。千歳の後ろ姿はヌードと紙一重、いや、殆ど素っ裸であった。
「……っ」
緒田は言葉を失くして惚れ惚れと見蕩れてしまった。
若さの特権である張りのある千歳の素肌は、染みひとつない真っ白な陶磁器のよう

に滑らかな流線を描いていた。そして、手指を広げて両腕を天に向かって突きだし、腰を僅かに拗(くね)らせたポージングは、括れと盛りあがりを余す処なく強調して、恰(あたか)も一幅の絵画を思わせた。

千歳も正面の姿見で緒田が見蕩れているのに気がついた。少し恥ずかしそうに顔だけ振り返って訊いてみた。

「ど、どうかしら……？」

その声に漸く我に返った緒田が嘆息とともに答えていた。

「す、素晴らしいですっ！……ありがとうっ♪」

思わず零れた『ありがとう』に千歳が瞬時に真っ赤になって慌ててカーテンを引いてしまった。

暫く衣擦れの音をさせていた千歳がまたカーテンの陰から、ちょこん、と顔だけだして照れ臭そうに言った。

「あ、あの……先輩のショーツ……」

えっ？、と首を傾げる緒田に手だけ差し伸べて千歳が訴えた。

「それ、先輩の……穿いて帰りたいから……」

千歳は尚も頬を染めたまま、緒田の両手に抱えられていたランジェリーの山の脇に

先程退けておいた萌黄色のショーツを引っ手繰ると、そそくさ、とカーテンの向こうに引っ込んでしまった。
それからショーツを穿き替えると、姿見の前で何度も深呼吸を繰り返して漸く頬の火照りが治まった千歳はフィッティングルームを出たのだった。

「温いですわ、ぜーんぜん、ヌル過ぎですわっ！」
コーサッカ王国の第一皇女チトセーヌ姫は、執事のカンベンが制作した体験版のＰＤＦファイルを読み終えてダメだしをしたのだった。
「こんなモノで眼の肥えた読者さまの購買意欲を刺激しようだなんて、ちゃんちゃら可笑しいですわよっ！……もっと、えっちいシーンがありましたでしょう？」
「しかし、姫君のあられもないお姿を安易に公開してしまいますのは如何な物かと……」
「お～ほほほほぅ！……あたくしに隠さねばならぬ秘密などありませんわっ!!……それにぃ、これはあたくしではなく、『あちらの世界』の『千歳さん』のえっちな冒険のお話ですものっ！……全然、ノープロブレムですわっ！」
「そ、それでは……ええと、ここなど如何でしょうか？」

カンベンが指し示した場面を一目見るなりチトセーヌ姫は慌てた声をあげた。
「こ、ここ、ここはダメですわっ！……あ、あたくしがワンころみたいに四つん這いにされて後ろから、ずこ、ばこ、されて悦んでいるシーンなんて……あ、やっ……その、悦んでなんか…い、いなかった…ですけど…も…」
胡乱（うろん）な眼で見返すカンベンに咳払いなどしてチトセーヌ姫が命令した。
「う、うんっ！……ここは消去なさいっ！」
「消去ですか？」
「勿論、バックアップごと消去ですわっ！」
「しかし、事実を歪曲するのは如何な物かと……」
「ほら、こんなシーンよりあたくしが……いえ、『あちらの千歳さん』が恋人……でなく、せふれ？……とかいう先輩に馬乗りになって責め立てているシーンがありましたでしょう？」
「ああ、黒のボンテージ服を身に纏われて鞭を手に……」
――ばこんんっ！　カンベンの頭にチトセーヌ姫のゲンコツが炸裂していた。
「は、話を捏造するんじゃないのっ！……それはお前の変態妄想でしょう？……ほら、貸しなさい……ええと、ここよ、ここっ！」

「ち、チトセーヌ姫っ、このお姿はっ!?」
カンベンが眼を見開いたのも無理はなかった。チトセーヌ姫が呼びだした映像の女性の姿は『こちらの世界』のチトセーヌ姫の衣装や髪型とそっくりだったからだ。
「うふふっ❤……何でもあの『せふれ』さんはこういうしちゅ…しちゅえい…しょん?……が大のお気に入りらしくってね、『あちらの千歳さん』が特注で作らせた衣装だそうよ?……『あちらの世界』にも秀でたデザイナーが居るのね♪……まるで、『こちらの世界』のあたくしと瓜二つですわねっ❤」

「ね?……いらしてっ♪」
緒田を横抱きにしたままベッドサイドに誘うと、千歳は自分だけベッドに登った。そして横坐りになって緒田を振り返り、黒いセパレートの上着を肩から外すようにして背中に摺らせた。
豊満な双つの真っ白い乳房が、ぷるるるうんっ、と揺れて緒田の眼の前に晒されていた。
緒田はその美しさに息を呑んで見蕩れていた。
その視線を充分に愉しんでから、千歳は両膝を立てると、ゆっくり、と左右に押し

開いていったのだった。
柔らかなシルク地のスカートが捲くれあがってゆく。その下から、こんもり、と盛りあがる大陰唇に守られていた薄桃色の秘唇と薄めの下草が現れた。《そこ》は、部屋の灯りを受けて微かに煌いてみえた。
「ねえん、見てるだけですのぉ？……おまんこ、舐めてぇ♪」
「へっ？」
間の抜けた声を洩らした緒田を擽ったそうに見遣って、千歳が揶揄(からか)うように訊いた。
「もしかして……クンニ、したことないのかしら？……緒田・せ・ん・ぱ・いっ♪」
「はへぇ!?」
何と言いたかったのか、意味不明の声を洩らして緒田の眼が千歳の股間と顔を行き来する。
千歳が更に誘うように両の手指を秘唇に宛がって、くぱあっ、と寛げた。
「……っ♪」
両目を皿のように見開いて見詰める緒田の変化に気がついて千歳が笑った。
「あはっ♪……嘉之のおちんぽ、おっきしてますわよぉ♪」

緒田の股間がスラックスの前を破かんばかりに盛りあがっていた。
「ほらあ、早くぅ♪」
千歳が揶揄(からか)うように緒田に催促した。
膝を落として千歳の股間に顔を近づけた緒田が躊躇(ためら)いがちに訊いた。
「あ、あの……な、舐める前に……そ、その……み、見てもいいですか？」
元カノはとても慎ましい女の子だったので、緒田は《それ》を直に見た事がなかった。二人の身体を覆った毛布の下で触らせて貰った事しかなかったのだった。
千歳が両の指で寛げた秘唇を食い入るように見詰める緒田に、笑いながら千歳が訊いた。
「なにを？」
「だ、だから……こ、ここ……」
「『ここ』じゃ判りませんわよぉ？」
「え、ええと……千歳さんの……お、おまんこ……」
求める言葉を引きだして千歳が頷いた。
「良くってよっ♪」
そして、緒田に委ねるように自ら秘唇を寛げていた手指を離して内股に滑らせると

腰を突きだした。
恐る恐る緒田の指先が少し食みだした小陰唇に宛がわれた。そこを押し広げようとした時、千歳がまた揶揄(からか)うように言った。
「でもお、嘉之のパソコンにはこういう画像がい～っぱい隠してありましたわよ？」
「ひぃ!?……ど、どうしてそれをっ!!」
緒田が、びくんっ、と仰け反って手を離してしまった。
「…だ、だってパスワードが……」
「ぷふぅっ！……あ～んな判り易いパスワードじゃあ、ね♪……でもお、あの画像は**パスワードの人の**じゃなさそうね？」
「なあっ!?」
意味深な言い方をする千歳に緒田が絶句した。確かに、緒田のパソコンのエッチ関係の『資料』の保存庫にはパスワードを設定していた。それは昨日までは元カノの名前であった。
「うふん♪……あたくしの父の仕事、なんだか知りません？」
「ええと、確かＩＴ関連だとか…聞いてますが…」
「そう、その中でもセキュリティ関係……って言うか、**ぶっちゃけ**ハッキング対策が

専門なんですのよっ♪」
「そ、それって……ま、まさかっ？」
「ああ、でも安心して……嘉之のご自宅も貴方のパソコンもセキュリティは完璧でしたわよ……**あたくし以外に**、侵入した形跡はありませんでしたから♪」
「……ってえ!?……い、いま、何気に恐ろしい事を言いませんでした？」
「うふん♪……門前の小僧なんとやら……あたくしね、こう見えてもハッキングはちょ～っと得意なのぉ♪」
「……っ!?」
完全に意識が飛んでしまった緒田を揶揄(からか)うように千歳が言った。
「嘉之って、結構**むっつり**さん？」
「や、その……」
「まあ、年頃の男の子ですものね♪……うふっ…あたくしは、えっちな男の子、嫌いじゃありませんわよ♪」
まったくどちらが年上か判らなかった。
「それよりぃ……広げて見ませんのぉ？」
「あっ、はいィ……そ、それでは…し、失礼します……」

あくまで生真面目に断って、緒田が指先を舐めて湿らせてから小陰唇に宛がうと恐る恐る寛げた。
「……ん……ぅん……」
指先の微かな刺激に千歳が小さく声を洩らす。
「……如何かしら？……あたくしの、おまんこ？」
「き、綺麗……です♪……ぴ、ピンク色で……す、少し……ぬ、濡れて…ます…」
感想を述べる緒田の言葉が吐息となって曝けだされた粘膜を擽り、千歳が恥ずかしそうに身を捩った。
「……あっ……ここが…お、おしっこのでる…と、処です…か？」
膣口の僅か上方に見つけた小さな孔を指して緒田が言った。
「やあん……よ、嘉之の…え、えっちぃ……」
千歳が羞恥に身を捩る。
「それで……こっちが、膣の入り口ですね……」
緒田の指先が躊躇(ためら)いがちに膣口を押し広げて覗き込んだ。
「うわあ、ちいさいぃっ！……こんな処に、本当に挿入(はい)るのかなあ？」
緒田がそう叫んだ時、寛げられた膣口から愛液が一筋、たらーっ、と会陰部（えい

んぶ：外陰部と肛門との間）を伝い落ちた。
（ひぃいいぃっ!?）
思わず洩れそうになった悲鳴を辛うじて飲み込んで千歳が身を捩る。まるで受け身な羞恥プレイのような状況に千歳は自分でも気づかぬ内に昂ぶっていたのだった。
その照れ隠しだろうか、千歳が緒田に催促する。
「ね、ねえん……早くぅ、舐めなめぇ…してぇ♪」
「わ、判りましたっ！」
緒田が唇を寄せ舌を差しだすと、滴った愛液ごと膣口を舐めあげた。
「ひゃうんっ♪」
少しざらついた舌先の感触に千歳が身を捩る。一方、緒田も舌先を、ぴりっ、と刺激する愛液に情動を昂ぶらせて千歳の秘唇にむしゃぶりついたのだった。
――はぶ…ぅ…じゅろっ、ちゅろぅ……れるっ、れろっ……あふっ……くちゅっ、ちゅぷっ……くぷっ、ちゅぽっ……ぢゅるるぅ、じゅるるっ……ぢゅる、くりゅっ…んん、んぐっ……はふっ……
「…あっ、んっ、んんっ……いいんっ……んっ、んんっ、んぁっ……そ、そこ…いいんっ……あっ、んあっ、あぁっ……お、おベロぉ…いぃいん♪」

――じゅるるっ、ちゅぷっ……ぢゅろっ、ずじゅ……じゅる、じゅぶぶぅ……ちゅぶっ、じゅるるっ……んくっ、んぐんっ……はぶっ……

緒田が舌先を膣口から差し入れて柔らかくうねる粘膜をこそぐように舐め廻し、滲みでてくる愛液を啜りあげる。

そして、鼻先を擽る千歳の薄めの下草の中に赤く膨れた突起に気がついて、膣口から抜いた舌先で突付いてみた。

「ひぃんっ♪……そ、そこも、いいぃんっ♪」

身を捩る千歳に気を良くした緒田が更に秘芯を捏ね廻した。

「いひぃんんっ!?……く、クリちゃん…いいぃっ♪……ね、ねぇん…そこ、剥いて……むいてぇっ！」

千歳のおねだりに緒田が指先を宛がって秘芯を露出させると、舌先を尖らせて磨り潰すように捏ねた。

「ひぐぅっ!?……ら、らめえぇっ!!」

千歳の腰がベッドの上でバウンドした。しかし、豪奢なベッドのスプリングが軋みも起こさず受け止める。

「あ、あの……ち、千歳さん？」

緒田が、おずおず、と声を掛けた。
舌先の責めが止まって、もどかしそうに見降ろした千歳の視線が緒田の口元に注がれる。
「……あ、あの……僕、そろそろ……」
「なあにぃ？……もう、あたくしの膣内(なか)に挿入(はい)りたいのぉ？」
些か、とろん、とした瞳で見詰められて、緒田が、くぴ、くぴ、と頷いた。
「仕様のない人……良くってよ、あたくしも嘉之のおちんぽを味わってみたいわ♪」
許しを貰って緒田が、いそいそ、と立ちあがった。
一瞬、躊躇(ためら)ってからその場で服を脱ぎ始めた。後ろを向いたりしたら千歳が嘲り笑うような気がしたのだった。
しかし、ブリーフ一枚になると流石に恥ずかしかった。先程、映画館で千歳の前に晒していたとはいえ、あそこはかなり暗かった。元カノとのエッチは、彼女の希望も汲んでほぼ真っ暗闇の中で行われた。二回ともだ。入室時は暗めに絞っていた部屋の灯りは今は煌々と点っていた。
千歳がM字に開いた膝の上に顎を乗せて緒田の股間を注視しながら囁いた。
「み・せ・てっ♪」

（ここは、頑張り処だぞっ！）
緒田は覚悟を決めて言った。
「そ、それでは……三ポーズ…くらい…」
そして、一息でブリーフを脱ぎ去ると、緒田はボディビルダーのように両腕を掲げて力瘤を作ると、むんっ、とポーズを決めた。
千歳の視線を股間に、いや反り返る《逸物》に釘付けにしたまま緒田がポーズを変える。腰に両拳を逆手に宛がい胸を逸らせて、ふんぬっ、と腰を突きだした。その動きに《逸物》が、ぶるん、と揺れた。
そして、三ポーズ目で緒田は片膝を絨毯に着くと、騎士（ナイト）のような仕草で両手を千歳に向かって差しだして見せた。
「あはははははははははっ♪」
そのポーズが余程受けたのか千歳が身を捩り足をバタつかせて笑い転げた。
緒田の眼の前で、千歳の剥きだしの股間から食みだした薄桃色の粘膜が、ぐに、ぐにゅっ、と捩れて見えた。緒田の心臓が、どくんっ、と跳ね《逸物》が体積を増していた。
「ああはははぁっ、可笑しかったぁ♪……嘉之もやりますわねぇ……素敵でして

よ❤……嘉之のおちんぽ、合格ですわっ❤」
そして、身体を起こした千歳が艶かしく誘った。
「ご褒美を差しあげるわっ……いらしてっ♪」
その言葉を受けて緒田がベッドに登り千歳の肩に手を置いた。
しかし、千歳が些か不満そうに言葉を掛けた。
「違いましてよ？……嘉之が下になるのっ！」
「へ？」
間の抜けた返事を返す緒田に千歳が少し怒ったように言った。
「あたくし、下になるなんて真っ平ですわっ！」
漸く千歳が『騎乗位』でしたいと言っているのに気がついて、緒田が苦笑を洩らしてベッドに仰臥（ぎょうが：仰向けに寝る事）した。それは緒田にとっても初めての体位であり、屈辱感よりも興味の方が大きかった。
（それに、『下になるなんて真っ平』って千歳さんらしいというか……）
千歳が艶めいた笑みで緒田を見詰めたまま太腿の辺りに馬乗りになった。そして僅かに腰を前に摺らせて、反り返って腹部に貼りついた緒田の《逸物》の裏スジを鵐（しとど）に濡れた秘唇で擦りあげた。

「おおぅ♪」
緒田が柔らかな粘膜が齎(もたら)した快感に声を上擦らせる。
「むふんっ♪……ほうら、嘉之の勃起おちんぽがお涎(よだ)を垂れ流して催促してますわよ♪」
そう言いつつも、千歳は尚も焦らすように腰を前後に振り立てて秘唇で《逸物》を擦りあげる。
「おほぅ……あうっ……ち、千歳さんっ！」
切なげに訴える緒田に千歳が笑い掛ける。
「むふんっ……嘉之のやらしい勃起おちんぽは、あたくしの膣内(なか)に挿入(はい)りたいのね？」
「は、はいぃ！……是非とも…お、お願いしますっ！」
「仕様のない人……」
揶揄(からか)うように言ってから、漸く千歳は腰を浮かせて、手指で《逸物》の根元を握って上向けると膣口に宛がった。
「……あんっ……それじゃあ、参りますわよっ♪」
膣口の粘膜を亀頭で擦ってしまい微かに声を洩らした千歳は、ゆっくり、と味わう

ように腰を沈めていった。
「あくぅうううううんんっ♪……お、おっきいぃ❤」
根元まで《逸物》を受け入れると、詰めていた息を吐きだして千歳が身を捩った。
「お、奥まで……は、挿入(はい)りましたわよっ！……んんっ……な、なんて…大っきくて、太くって、硬あ～いのぉっ♪」
眉間に皺を寄せて些か苦しそうに千歳が訴えた。
「し、子宮が……あたくしの子宮が、持ちあげられてますのぉ♪」
弟の《それ》も標準よりはかなり大きかった筈（と思ったの）だが、『二本目』の《逸物》は遙かにそれを凌駕していた。
「ち、千歳さんの膣内(なか)も、凄い締めつけで……き、気持ち好いですっ!!」
緒田の言葉に、元カノとどっちがイイの？、と喉まででかかった言葉を千歳は飲み込んだ。そのような質問ははしたないと思ったのか、あるいはプライドが押し留めたのか。いや、そうではなかった。
（あたくしの方がイイに決まってますわっ♪）
如何にもな回答を自ら心に刻んで、千歳が腰を振り始めた。
「……んん、んっ……嘉之のおちんぽ……ん、んん……な、膣内(なか)が……んん…

…抉られて……き、気持ち、好いっ♪」
千歳の上下動に連れて、言葉どおりに緒田の張りだした雁首が千歳の狭隘(きょうあい)な、しかし、充分に潤っていた膣壁をこそいでゆく。
「…あん、んんっ……いいんっ……んん、ぅんんっ……気持ち…いいぃん♪」
――ぬちゅ、くちゅっ……ぬちゅ、ぬぽっ……くちゅ、くぷっ……くちゅ、ずちゅ……ぬちゅ、ぐちゅっ……
早くも結合部から洩れ聞こえる卑猥な恥音に緒田が視線をそこに向けると、千歳が腰をあげる動きに連れて《逸物》に絡みついた粘膜が食みだして、腰を落とせばまたそれが巻き込まれてゆくのが見えた。
(う、うわあ、なんてエロい眺めだっ!?)
そして、結合部からは卑猥な水音とともに押しだされた千歳の愛液が緒田の陰毛を鵐(しとど)に濡らす。
「あん、ああん……す、すごいぃ……んん、あんん……子宮口にぃ……ん、んんっ……ご、ごつん、ごつん……くるのぉ……」
その声に視線をあげれば、薔薇色に頬を染めた千歳が艶めいた瞳で見降ろしていた。その後ろで柔らかなウイッグと額に嵌めたティアラに吊られた淡い黄色の薄布のベー

ルが、右に左に揺れている。更にその下方には、千歳の**けしからん膨らみ**が、たぷん、たぷぷぅんっ、と揺れていた。
「ああん、ああぁん……好いよぉ♪……んっ、あんんっ……嘉之は……んん……嘉之も、好いのぉ？」
視線を絡ませたまま千歳が問い掛ける。
「い、好いですっ！……す、すっごく……気持ち好いですっ♪」
多少不安もあったのか、緒田がそう答えると満足したように両目を瞑り、千歳が腰振りに専念し始めた。
最初は千歳の狭隘(きょうあい)な膣の締めつけに、あっぷあっぷ、だった緒田も多少の余裕を取り戻して下から突きあげを開始した。
「ああん♪……ひんっ……んん、うんっ……あひぃ！……こ、こらぁ……ひぐっ……よ、嘉之ぃ！……ちょっ…ひぃんっ……こ、こら…ってばあっ！」
自分のタイミングで腰を振っていた千歳が緒田の突きあげにリズムを乱されて抗議の視線を投げ降ろす。何せ、過去の相手は自分に言い成りの弟だけだった。自分の気持ちが好いように動けば良かったのだが、今夜は些か勝手が違っていた。
「もおぉっ！……そんなコトするなら、こうよっ！」

お譲言葉も忘れて怒ったように緒田の胸板に両手を突いて、挿入したまま腰を浮かせた千歳が両足を前にだした。それから、少し背後に倒れ込むようにして緒田の膝上辺りに両手を移動させて、にまあっ、と笑みを洩らす。

そして千歳は、腰を浮かせたまま前後に拗(くね)らせるようにして《逸物》を扱きあげたのだった。

「おわあっ!?……ちょ、ちょっと……わひゃあっ!!」

緒田が突然襲った未知の快感に身を捩った。

「むふうんっ♪……これえ、イイでしょう?」

ＡＶで仕入れた腰振りダンスで優位を取り戻した千歳が自慢げに鼻を鳴らす。そして、更に《逸物》を回転軸にして緒田の上で腰を回転させた。

「かはあっ!……ち、千歳さん……た、タイム、たい……むぅ!?」

声を上擦らせて静止を求める緒田の言葉をスルーして千歳が腰を振り立て、拗(くね)らせる。まるで下半身だけ別次元の蠢きに緒田がシーツを握り締めて快感を堪えている。

「ふふぅんっ♪……お坊ちゃまが、あたくしを責めようだなんて……百万光年がトコ、早いですわよっ!!」

自分の身体の下で身を捩る年上の男子に、千歳の昂ぶりが頂点に向かって加速した時だった――。

――ピンポ～ン♪

突然、ペントハウスにドアチャイムが鳴り響いたのだった。

「こ、この辺りでもういいかしら……」

チトセーヌ姫が再生をストップさせた。

「ち、チトセーヌ姫っ？……ここで、『体験版』を終わるんですかっ!?」

「い、いいのよ……多少後を引くくらいで……」

「何故、お顔が赤いのでしょうか？」

「う、うるさいわねっ！……お終いったら、お終いなのっ!!」

＊

申し訳ありませんが体験版はここまでです。

こちらの体験版にて、作品の雰囲気などをご確認戴けたらと思います。

お気に召しましたら、本篇もどうぞ宜しくお願い致します。